

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第 5 回フォーラム研究会
逐語録

(木村) それでは第 5 回フォーラム研究会を始めます。

まずは資料の確認です。いつも通り議事次第が F5-0 です。次が、第 4 回フォーラム研究会の議事録案です (F5-1)。次が、反省会のメモです (F5-2)。次が、第 4 回フォーラムの時間配分結果です (F5-3)。次が、第 4 回フォーラムに関するアンケートの自由回答です (F5-4)。次が、第 5 回フォーラムのスケジュール表です (F5-5)。次が、エネルギーと原子力に関するアンケートです (F5-6)。フォーラムインタビューご協力のお願いというものが F5-7。シンポジウムについての 1 枚紙が F5-8 になります。最後が第 5 回フォーラムに関するアンケートということで、F5-9 でお願いします。以上ですけれども、よろしいでしょうか。

今日はかなりいろいろな議題があるので、サクサクと進めていきたいと思います。

0. 議事録確認

(木村) まず、議事録確認です。資料は F5-1 ですね。こちらはメールでお送りさせていただいていますので、何かあればまたご指摘ください。

基本的には、第 4 回フォーラムの準備と、第 5 回のテーマについて議論したということになります。最後に、アンケートの話も少ししたということになりました。

1. 第 4 回フォーラムの反省

(木村) 次の議題に入ってしまいたいと思います。まずは第 4 回フォーラムの反省ということで、フォーラムが終了した後の反省会の皆さんの発言を、メモしてもらっていますので、こちらも少し目を通していただければと思います。

第 4 回フォーラムは、体制が第 5 回とは違いますので、時間配分結果は参考程度ということですが、前回は、時間きっちりできたなということです。

また、F5-4 はアンケートの自由回答ですが、時間が不足している以外は特に気になる点はないと思いますので、前回はかなり皆さん満足されていたようですね。

この辺を少し見てもらって、皆さんからご意見をお聞きしたいと思いますが、いかがでしょうか。土田先生、アンケートで、この辺は指摘しておきたいところはありませんか。

すか。

(土田) Q3の学会員のご意見で、境界を越えるフォーラムなのですけれども、改めてそのこのバリアを感じたという趣旨の発言がありました。首都圏の参加者からも、「共通理解が得にくいこと」が挙げられています。ということで、このフォーラムをもっと続けていけば、また変わっていくと思うのですけれども、少なくとも第4回の時点ではこういう印象が持たれていると。部分的にですけれども。ということは、少し把握しておいてもいいかと思います。

(木村) ありがとうございます。私としては、ようやくここまで来たかな、という感じなのですけどね。たぶん、今まではこういうことすら気づいていなかったということなので。ようやく、どこに境界があるのかなって思えるようになったと。

(土田) そうだと思います。境界が見えたということだと思いますね。

(木村) なので、次回は、もう1回原子カムラについて考えるというテーマですけれども、じゃあ見えた境界をどうしていくべきなのかという話ができるといいなという期待があります。

(土田) そうですね。

補足しますけれども、このアンケートのQ1の、良かったと思うことに関して言えば、意見が深まったとか、両方の意見を共有できたとか、視野が広がったとか、それなりに書かれていますので、否定的に捉えられているわけではないのですけれども、まあ、やはり、先ほど言ったように、違いが分かってきましたということだと思います。

—— 最初はどこに境界があるのか分からなかったけれども、立場が違う同士で話し合ってみて、ああ、同じ人間なんだ、ということが分かった。とりあえず話せるんだ、ということが分かった。

で、次の段階に来て、冷静に話せるけど、やはり経験とかいろいろなものから、意見としては違うものがあるんだ、ということが見えてきた。そういう状況なのかなと伺っていました。

(木村) はい。かなり深まったなという感じがしますよね。

—— 前にお話したと思いますけど、学会員は、一般の人は知識がないから不安に思っているだけで、私たちが持っている知識を提供してあげれば、そんなのはすぐ解消すると思

いこんで、一生懸命知識を教えよう、伝えようとして、その姿勢がありありの人が何人かいらっしやった。だから、そういう人の意見じゃないかなと。せっかく私がこれだけの知識を教えているのに、どうして分かってくれないんだろう。ますます溝は深いと感じました、ということではないかなと。

(土田) だと思いますね。例えば前回も、「やはり不安なのです」とおっしゃっている方がいましたからね。よく話を聞く方だなんて見かけていたのですけれども、にもかかわらず、自分の意見を表明してくださいといったら、「でも不安なのです」でしょう。やはり、学会員の方で、はたらきかけようと燃えていた方にとっては、うーん、どうしたらいいんだろうって。

—— 「知識が欠けているから不安に思っている」のではない、ということが分からないといけない。それがこのフォーラムの非常に大きな意義だと私は思っているので、それに気づいてくれることは、非常に大切なことだなと思います。

—— 市民の方が、漠然とした不安をうまく言葉でできないとおっしゃっていたんですね。

—— 知識欠如が原因ではないということを、専門家はよく分からないといけないと思いますね。知識を提供すればするほど、その不安は拡大するおそれすらある。

(土田) あります。別のところですけども、ネット調査で、学齢期前のお子さんをお持ちの20代、30代の女性限定で、電磁界はこんなに安全です、という情報を与えたら、前よりも不安度が増した。やはりあるのだなと思いました。

—— そうですよ。知識が欠けているから不安に思っているわけではないんだと。

—— でも、学会員の方のご意見で、「漠然とした不安は人に説明するのが難しい」ということが分かった、というようなのがあるんですけど、その辺りを理解された方がいらしたんだな、と思いました。

(木村) はい。ということで、面白い試みになってきているなということですね。前はすごい資料が出てきて、どうなることかと思いましたが、コミュニケーションのルールを守るセンスとか、お互いを尊重するということがずいぶん身についてきているなど。そういうこともあって、スムーズに進んで。なおかつ、こういう意見があるというのを見ると、やはり5回やるべきだなと思いますね。

(土田) 可能だったら、8回とかやってみたいところですけどね。

—— 8回もやると、やはりどこかで次の展開に持っていかなければいけないので、設定が大変な気がしますけどね。

(木村) もう1回くらい、第4回みたいなものをやっても面白いかもしれないですよ。

—— やはり皆さんが言うチャンスが多かったと思うのです。たまっているものが吐き出せているんですよ。それで不満が少ないのだと思います。

(木村) そうだと思います。

—— 先ほど来から、原子力の知識が深まれば理解してくれるんだと思っていた専門家も多かったのかもしれないけど、そうでもないということに気づいた人もいるのではないかという話でしたよね。

そうすると、じゃあどうしたらいいかというときに、自分の話し方とか、接し方とか、ふるまい方とか、自分が何か工夫するとか、変わるとか、そちらにマインドが行っている方が、まだあまり多くないかなと。

でも、コミュニケーションが成り立ってきているので、詳しくお話を伺ったりすると、かなり変わっておられるのかもしれないですね。

(木村) そうですね。この後どのように展開するかは今日の議題にもありますので、そこで何かあれば、少しお話をいただければと思います。

2. 第5回フォーラムについて

(木村) それでは、次の議題にいてしまいたいと思います。第5回フォーラムについてですけれども、スケジュール表を作っております。

基本的には、第3回のスケジュールとほとんど変えていません。

13時から始まって、15分間、自己紹介の時間を取っています。

ちなみに、くじ引きは、第3回と同じく最初にやって、ファシリテーターもくじ引きで決めるといって方向でいきたいです。

その後、15分間、前回までの振り返りとグループワークの進め方を確認するという時間を取ります。

13 時半から 45 分間、グループワーク 1 です。テーマは、『もう一度考えよう・・・「原子カムラ」はあるのか、ないのか、何なのか？ 「原子カムラ」というものをどうしたらよいか？』ということにしています。前回皆さんにアナウンスをして、これでいきましょうということも確認しているということですね。今回は、また 3 グループに戻してやります。また 15 分前にアナウンスというスタイルでいきたいと思います。

次に、15 分間で全体共有。各グループ 5 分の発表になります。

その後は、この後の進め方を 5 分くらいで確認をして、休憩と質問作りで 15 分。ということで、15 時まででまず前半ということになります。

その後、グループワーク 2 で質問をチョイスして、回答を作る。

今度は回答の発表ということで、1 班 4 分にしようかと思ったんですけど、ちょっとこの後を考えて、1 班 3 分で、合計 10 分を取っています。

次のページですけれども、アンケート記入があつて、最後に特に言っておきたいことの発表です。ここなのですけども、今日の話にするか、それとも、5 回やってみての話を聞くか、どちらがいいのかなと思っているのですけれども、この辺も少しご意見をいただければと思います。

その後、今後の予定ということで、インタビューとアンケートとシンポジウムの話をちゃんとしておかなければいけないので、結構時間がかかるなと思って、ここで 10 分取っているということになります。

16 時半にフォーラムが終了して、その後は懇親会を実施したいと思います。

というスケジュールを組んでいますけれども、何かあればお願いします。

—— 次は最終回ですので、参加者にとって、いつもの話し合いの共有が終わっただけではなく、何かもうひとつ胸に響くというか、納得するものがほしいのではないかと思うのですね。自分が 5 回参加して、どういう成果があつたのかとか、そういうものを持って帰りたいのではないかと思うのですが、そういう、少し話を深めたり、意見交換ができるチャンスはどこに作るのか、少し考えてもいいのかなと思うのですが。

それを回答紹介のところに持ってくるのか。それとも、先ほど検討事項とおっしゃったような、最後の振り返りのところで、今回の振り返りと総合した振り返りということで、30 秒ではなくて、1 分くらい OK にするとか。どちらか考えてはいかがかなと思うのですが。

(木村) 回答紹介のところでやるとしたら、どういうことになりますか？

—— 質問をした方が、その回答を聞いてどう思われたかとか、そういうことを少し言っていたとか。

でも、全員が話せるわけではないので、言える人が言ったことの印象が強くなるという

きらいがあるので、全員がおっしゃったことを共有したほうが公平感があるという判断であれば、最後のところということになりますね。

キャッチボールで深まる面白さよりは、今回の場合は、それぞれがどのように思われたかの全体像の把握が大事だと考えるのであれば、最後の全員の振り返りを厚くすることもできるかと思います。

(木村) そうすると10分増えてしまうのですよね。1人1分にしようかとも思ったのですが。

—— 今回の余裕は、5分ずつですよね。あまり余らない可能性はありますよね。

—— 確かに、全体としてというよりは、個性のあるそれぞれの人がどう言ってくれるかなという興味がありますね。全体をひとくくりにはなかなかできない。皆それぞれ違いますから。専門家にも、一般の人にもいろいろな方がいらっやって、それぞれの方がどう思ったのか。あの人は最後にどういうことを言うのかなというのは非常に興味深いですね。それが将来こういうものを企画するときの、すごく貴重な材料になるような気がしますね。

—— グループワーク2は、第2回の時間設定は、次回のテーマ提案を入れて45分だったと思うのですが、もう少し短くできないですか？

(木村) 第2回は次回のテーマ提案もやりましたが、第3回はやっていないのですよ。第4回のテーマがもう決まっていたので。

で、45分で3問を選んで回答してください、でギリギリだったので。割とカツカツですよ？

—— カツカツでした。

(木村) あときは、A班がかなりサクサクやっていたのにも関わらず、3問目は回答できなかったのです。

だから、グループワークはカッコで5分取っていますけど、このカッコのところを頑張っけて詰めていくしかない、という気はしているのですけどね。

—— 全体で、カッコの5分が3か所、15分あるのですよね。だから、そこをなんとか、少しずつでも詰めていければ、最後にあと10分が取れて、1人1分の発言ができるかな、っていう感じですね。

(木村) では、余裕をなくしますか？ 2回目のグループワークに入るのが14時50分になるように調整をしますか？ でも、全体共有の5分の余裕は絶対必要ですよ。

だから、グループワークは、15分前にアナウンスして、5分前にアナウンスして、頑張って45分びったりで終わらせる方向で。グループワークの5分は頑張って削る。そうすると10分間空くので。

アンケート記入に10分取っていて、そのあと10分間で発表というのは、これはアンケートの記入は本当は7、8分なのです。だからアンケート記入の開始が15時50分になるように調整をして、16時から「特に言っておきたいこと」を、1分目安にして、今日の感想と、5回やってみての感想を言ってもらおうと。

—— 今日の感想と全体の感想というのは、両方ともきちんとコメントしてくださいと言ったほうがいいですよ。

(木村) はい。言ってもらったほうがいいと思います。今日は2つ言ってくださいと、明確に。まあ、そう言っても、言わない人もいるでしょうけれども。

—— 仕分けしてお話になれる人と、そうじゃない人というと思います。

—— ただし、両方話していただいたほうが、皆さんがどんなことをおっしゃったか、あとでまとめると、意味のあるものになりそうな感じはしますね。

あと、第4回るときに、今までよりもアンケート記入を長く時間を取ったのです。コピーが帰ってくるのを待つために。長く取ったほうが、皆さんしっかりとアンケートを書いて下って、きっとアンケートの内容が充実したんじゃないかなという気はしています。

(木村) たぶんそうなのです。なので、アンケート記入はやはり10分ですね。5分だと短いですね。

—— そうですね。この前はほとんどの人が、裏面の最後のところを書くくらいまでは見守っていたつもりなのですけど。

(木村) そうですよ。前回の時間配分表を見ると、そこまで待って、だいたい7分です。だから、そのくらいのタイミングで話に移ってもいいかなと。

で、今後の予定は10分取っていますけど、10分では説明が終わらない気がします。シンポジウムに出る人をどう決めるか。ここで決めたほうがいいのかもわからないのです。それなので、結構時間がかかるかもしれません。インタビューの日程の話もそこでやりますし。シンポジウムに出てくれる人の決定の方法の説明とかもやったほうがいいのかと思います。

て。

—— 何人ぐらいを想定しているのですか？

5. シンポジウムについて

(木村) では、シンポジウムの話に移っていいですか。F5-8 です。シンポジウムの今のところのスケジュール案を出しています。

日時は 9 月 16 日の月曜日・祝日です。時間は、フォーラムと一緒にいいかなと思って、13 時から 16 時半に設定しています。

プログラムですけれども、最初に 5 分間開会挨拶、誰がするのは謎ですけど、があつて。

その後、研究の趣旨説明がやはり必要かなということで、15 分で説明します。

その後、20 分ぐらいかけて、土田先生から社会調査の実施とフォーラム参加者の決定の部分の話してもらおうかなと。それをやってもらったほうがいいかなと思うのですね。どうやって導入したかという議論になると思うので。

(土田) そうですね。疑問を抱いている方もいらっしゃいましたからね。

(木村) その後、30 分で、竹中君にフォーラムの実施状況の紹介をしてもらいます。5 回でどのように進んでいったのか。ただ、写真は使えないので、つまらないスライドになってしまうのだろうとは思いますが、その辺をちゃんと伝えてもらえればなと思います。

その後、フォーラム参加者からコメントで、首都圏住民の代表と、学会員の代表ということで、1 名ずつ、感想をもらおうかなという感じのスケジュールです。

ここで休憩を取って、その後、どなたかコメンテーターに、研究に対するコメントを 15 分くらいで話していただく。

その後、会場からの質問に対して回答をしたり、会場とディスカッションしたり、コメンテーターから質問を受けて、それに回答したり、そういう時間で 70 分。

最後に 10 分で、次年度に向けての課題と抱負を、私がまとめて、最後に閉会挨拶という感じで、一通りの今年度のフォーラムの取り組みを紹介しながら、次年度につなぐというようなシンポジウムでいかがでしょうか、ということを考えています。

裏面が確認ポイントになっています。

フォーラム参加者からのコメントは、どういうものを含むかということについて、ちょっと考えています。どういう思いでフォーラムに参加したか。フォーラムはどうだったか。いいところ、悪いところを挙げてもらう。フォーラムに参加して気づいたことも話しても

らう。最後に、今後の研究に対する期待などを話してもらえばいいかなと思っています。

この代表者をどうやって決めるかということで、今考えているのは、自薦・他薦を問わず推薦してもらって、多いほうから当たるとか、そういうやり方で決めさせてもらいます、ということの確認を取る、という手順かな、と思います。

あとは、第5回終了後のアンケートが F5-9 についていますけれども、いつも Q4 は、次回以降で気をつけたいことがあれば書いてください、なのですけれども、今回の Q4 は、シンポジウムで 25 年度のフォーラムについて総括します。そのときに読み上げてほしい感想などがあればお書きください。というふうにして、ここに一言書いてもらって、他にもこういうコメントがありましたということ、例えば司会から紹介するとか、そういうスタイルもあるかなと思っています。

—— 代表が 1 人ずつというのがちょっと気になりますね。いろいろな人がいらっしやるので、その分布を伝えたほうがいいような気がしますけれども、どうでしょうか。

(木村) この辺は少しご意見をいただきたいと思っています。

私は、シンポジウムの絵面を考えると、やはり誰もいないのは良くないなと思っています。

—— では、首都圏住民 10 人が元々どういう思いで参加して、終わった後それぞれがどういう思いを抱いたかというのを、代表の人に紹介してもらおう。

(木村) それはできないと思うのですよ。私たちは仕事だからそれをやりますけど。そこまでは期待できないと思うのですよね。

—— 最後に 1 分ずつ話したことを、我々のほうで整理して、それを提供してあげれば。

(木村) まあ、そうなのですが、それをやると、別に参加者じゃなくていいよねということになる。

私がここで参加者を入れているのは、あくまでもその中の 1 人なのだけど、実際に参加してくれた人がどういうことを思ったのかを言ってもらえればいいかなと思っているのですね。

—— ある程度個人的な感想でよろしいということですか？

(木村) むしろ、個人的な感想をもらおう。他の人の感想を代表して言ってください、とはお願いしないで。ただ、他の人の感想に関しては、どこかでフォローしなければいけない

い。

——それがアンケートの Q4 で補えるということですね。

(木村) 補おうと思っているということです。

(土田) よろしいですか。率直に申し上げますね。これはシンポジウムというよりは、報告会なのだろうと思うのですね。

シンポジウムというのは、いろいろな意見の人が自説を述べて、それに対してフォローするという形式を取ると思うんです。ですから、私の勝手な思い込みでは、シンポジウムのときには、参加者が少なくとも4人か6人は登壇するのだろうなと思っていたんですね。

1人ずつとなると、これはやはり報告会でしょうね。参加者にこんな人がいましたということを、世間一般の人に知ってもらおうと。

(木村) シンポジウムはメディアも来るので、あまり参加者を前面に押し出せないのですよね。

(土田) だとすれば、もう参加者を出さないとか。

(木村) 出さないと、絵面的になあ、って思ったところがあつて。

(土田) 呼びかけて、交通費も、予算があるのであれば出す。けれども、壇上には上げない。何かあったときには、フロアからの発言という形で、あまり写真など撮られないような形で、発言だけはしてもらおう。

(木村) それをやると、ぶらさがると思うのですよ。ぶらさがったら意味がないのですよ。

(土田) なら、もうビデオで報告するという形で、参加者をわざわざ出す必要はないんじゃないだろうか。

(木村) どうですか？

——一般の方は、代表として発言できるかということ、難しいのではないか。自分の意見は言えても、代表しての総括的なことは言えないのではないかというところで、今、どうしたらいいかと言っているんですよね。たぶん、1人が総括するのはできないと思いますね。

やはり、自分の意見しか言えないような気がする。

(土田) そうですね。

例えば、インタビューをやるでしょう。ビデオを撮らせてくださいという形で、そこから2、3分、ここをシンポジウムで流してもいいですか、やれるでしょう？

(木村) それはやらないほうがいいと思うんです。それは無理です。

(土田) そうですか。でも、1人っていうのはひっかかるな。もしそれだったら、参加者を選ばせるよりは、こちらで指名したほうが早いと思う。

—— 参加者に、シンポジウムで顔を明らかにして、参加してもらえる人はいらっしゃいますか、というのをまず聞いたほうがいいような。

(土田) もちろん、それが大前提ですけども。

(木村) それはもちろんやります。

—— そうした上だったら、なんか、大丈夫そうな気がするんですけど。

(土田) シンポジウムに出てもいい人はいらっしゃいませんかと言って、何人かに手を挙げてもらう。その場で決めないで、手を挙げてくれた人に個別にこちらから交渉して、あとで決める。

その場でやると、やはり集団力学ですから、変な決め方になる場合もあるし。残り10分で、いろいろなこと盛りだくさんでやっている中で、参加者の方々、シンポジウムの出席者を決めてください、みたいなことをやると、ちょっと怖いことは怖いですけどね。

(木村) いや、だから、その場で決めないですよ。だけど、こちらが恣意的に指名するというのは、もうそこで情報の偏りがあるわけですから。

(土田) でも、それは、このやり方をやる分には、五十歩百歩ですよ。1人しか登壇しないということは、いずれにしろ偏るのだから。

—— 都合のいい人を選んだのねって言われたいための仕組みが難しいような気がする。

—— ちなみに、2名2名は可能ですか？

(木村) 20名のうちの4名は、かなりでかいと思うのですよ。

—— そうは思います。

(木村) 100名いれば、2名2名くらいでいいけど、20名で4名出すというのは、あまり良くないんじゃないかなって感じがするんですけどね。

—— 木村先生が狙っていらっしゃるの、こんなふうにはフォーラムをやったんだなっていう生き生き感というか、そういう実感を、シンポジウムに来ている人たちに与えたいと。

(木村) そういうことです。

(土田) 私は、画像は編集もできるわけだし、ビデオ参加が一番無難な気がします。その場の雰囲気は、せっかく撮っているわけですから。

(木村) いや、それは無理なのです。録画内容は一切公開しませんと言っているのです。あれは、我々の中でのチェックものとして撮っているのです。

(土田) ああ、そうですね。

(木村) だから、シンポジウムでビデオを出したり、写真を出したりは、できない。

(土田) でも、そこまでやるなら、参加者をわざわざ出さなくても…。

(木村) 生き生き感がほしいということなのです。誰も出なかったら、なんか、つまらないですか？ 参加者が、私たちの狙いと違うようなことを言ったとしても、それはひとつのものであって、別にそれで価値が下がるとか、そういうことではないと思うのですけど。

(土田) 分かりました。そうしたら、参加を呼びかけるときには、自分の意見表明をしてくださいというわけではないです。フォーラムに参加してどうだったか、感想を言ってくださいと。

(木村) だから、ここの確認ポイントに、どういうコメントを言ってもらおうかが書いてあるわけです。このポイントについて話してもらおうことになりますけれども、というのは

言った上で、です。

決め方は、基本的にはまた投票形式なのかなと思っています。2つくらい用紙を用意しておいて、1つには、誰にしゃべってもらうのがいいでしょうか、というのを書いてもらう。ひとつは、あなたがもし多票を取ったら、登壇してもらえますかというのを書いてもらう。

—— 推薦がいっぱい集まった人でも、自分は絶対出たくないと言われたら、もう出ないわけですね？

(木村) はい。そういう人は出られないので。結局、誰も出ないということもありうるんだけど。

—— そうですね。でも、自薦・他薦問わずなので、自分が出たい人は自分を推薦しておけばいいし。あの人をお願いしたいっていう人はその人の名前を書けばいいのだから。それはいいかなとは思いますが。

(木村) で、自分が出たくないと思えば、出られませんって書いておけば、票が集まったとしても、出なくて済むと。

—— シンポジウムで発言していただくときには、フォーラムに参加した首都圏住民を代表する意見ではない、専門家を代表する意見ではない、個人の感想である、という確認はお話した上で、やっていただくわけですよね？

(木村) まあ、その人に言ってもらうのはたぶん無理でしょうけど、司会者がそういうものですよということを言うのでしょね。

なお、他にもこういう参加者がいて、シンポジウムで話してほしいという意見をいただいているので、それは読み上げさせてもらいますって、司会が、その2人の後に言えばいいかなと思っているのですけど。

—— 私はやはり、1人、1人がじっくりと話すよりは、こここのところ、振り返りは短い時間だけれども、キーワードがポンポン出てくるようになっているので、せめて2人、2人くらいでもいいかなと思うのですよね。それで、あまり長くしゃべってもらわずに、逆に、本当にその人にとっての大事なキーワードを使って、話してもらう。

(土田) 同感ですね。1人5分でいいと思います。

—— 10分はちょっと長いですよ。10分話そうとすると、なんか他のことも言ってしま

いそうな気がするんですけど。5分くらいだったら。

(木村) 4名確保できるでしょうか？そこが一番のポイントだと思うので。

(土田) いや、やってみないと分からない。4人くらいは手を挙げてくれるんじゃないですか？

(木村) いやあ、特に専門家は少ない気がする。

——ただ、出る出ないは、やってみないと分からないけれども、当日登壇してお話しする状況を自分でイメージしたときに、専門家の方はそういう場面に慣れている方も多いかもしれないけど、首都圏の一般市民の方は、同じ立場の人がもう1人いてくれると心強いというのはあるかもしれない。

(土田) 最初に年齢・性別で分けていったわけだから、専門、一般、男女で4人でいいんじゃないですか？

(木村) 男女でやると、その時点でいない可能性が出てくるので、そんなにカテゴライズしないほうがいいと思います。

——ただ、一般の方が10分も皆の前でしゃべるといのはかなりのプレッシャーになると思うのですよ。5分でも長いような気がしますから、もっと人数を増やしたほうがいいと思います。そうすると、出る人も気が楽だと思うんです。

(木村) あらかじめこの題を挙げておくので、それでまとめてきてくださいねと。その場で言うのは無理だけど、この題について話してくださいってお願いするので、そのくらいはできるのでは？まあ、10分は確かに長いかもしれないけど、A41枚書けば、5分くらいですから。

うーん、それだったら4人にしますか？

——ちなみに、パネルディスカッションのときは、その方々は登壇されるのですか？

(木村) そこも気になるのですよね。

会場からの質問は、質問紙形式にしようと思っているのですよね。その場で手を挙げてもらうのではなくて、質問用紙を配っておいて、講演を聞いて質問があれば書いてもらって、それを回収して、休憩中に仕分けをして、なるべく多くの回答をしてあげる。

—— 手を挙げさせると、特定の人に集中してしまう危険性がありますからね。

—— そのやり方でいいと思います。

(土田) そのやり方をやるんだったら、これにも誰か責任者をつけておいたほうがいいですね。私が質問を交通整理しました、って言ったほうがいいと思います。できれば第三者が一番いいんですけど、まあ、そこまでしなくてもいいとは思いますが。

(木村) まあ、それは私がやろうと思っています。

調査関係とか、全体のバランス関係の話になれば、土田先生に振るし。あとは、誰に聞きたいかも書いてもらえばいいので。そういう質問紙を用意しておけばいいので。

(土田) やはり、特にマスコミ辺りは、参加者に聞きたいっていうのが出るでしょうね。

(木村) 出ると思います。

—— インタビューしたがりですよ。

(木村) そう、それが一番怖いのですよ。

—— 人数を増やすと、絶対ぶらさがりますよね。2人だつてぶらさがると思うけど。

(木村) 2人だったら、まだガードはできますけど。部屋に避難させればいいので。出ていくときに一緒に出ていけばいいだけなので。

(土田) ちゃんとプライバシーというか、守るという形で参加してもらっていますので、という形で。

(木村) メディアの対応は、私たち研究グループでやるということだと思います。参加者には感想を言ってもらうけど、その後のぶらさがりはちょっと。

—— ぶらさがりは勘弁してくださいって言ったほうがいいんじゃないですか。

(木村) 言ったほうがいいですよ。

(土田) 質問も受け付けないことにしますか？

—— パネルディスカッションには出ないということですか？

—— パネルに出るのは難しいように思うんですけど。

(木村) 難しいですね。パネルディスカッションは長いので。1時間そこに座ってくださって、結構厳しくて。

(土田) 私は、もう、休憩の時間に、お帰りになりたければどうぞ、でもいいような気がしますね。

—— 帰らないとは思いますが。袖で聞いてもらうとか。

—— 関係者席で囲めばいいのでは？ 最後まで接触しないように送らせて帰らすか、先に帰らすか、何か。

—— 会場からの質問は、参加者への質問が集中するような気がします。土田先生、木村先生への質問は、おそらくあまりない。私がフロアにいたら、絶対質問しますよ。

(木村) そうですね。

—— 参加者が変わって、サブファシリテーターが皆答えたりして (笑)。

—— それはいいんじゃないですか。

—— 状況だったら話せますよね。

(木村) 状況に関しては、それこそ本当は、参与観察をやっている人が話すんです。だから竹中君に入ってもらっているんです。

—— 分からないことは分かりません、話せないことは話せません、それは範疇じゃないです、ってはっきり言えばいいんですよ。

—— 会場とのディスカッションにフォーラム参加者が入るのは、ちょっと危なっかしいなど。

(木村) そんな気がしますよね。

—— 質問が来たときに、どういうふうに答えるか、コントロールできないし、してもいけないだろうし。

—— だから、ディスカッションには参加させないという方針がいいと思いますけど。発表だけ。

—— 私もそう思います。

(土田) ひとつ関連してなのですが、私が発表する中に、フォーラムの後、毎回フリーアンサーでアンケートを書いてもらっていますよね。それを含めることを考えていますか？

(木村) いや、それは考えていません。それを含めるとしたら、竹中君の部分かなと思って。

(土田) どちらからやってもいいんですけども。それを発表するのであれば、参加者にわざわざ来てもらってどうこうというようなことはあまりなくて、本当にその場の雰囲気伝えるだけでよくて。

その手の質問に関しては、毎回アンケートを取っているので、その結果に基づいてお答えします、という形で、我々から話せるんじゃないですか？

(木村) ええと、それは、フォーラム参加者には来てもらうんですよね。来てもらって、発表はしてもらおうけど、ディスカッションには出ない。

(土田) 出ない。

(木村) ええ、それでいいんじゃないですか。

—— そうすると、ディスカッションには参加者は参加しないという方向になるんだとしたら、先ほど来、参加者のコメントは4人くらいのほうが良いというご意見が多かったけれども、4人も出ているのにディスカッションに出ないと目立っちゃうので、逆に、2人くらいに絞って、それで、登壇しませんというほうが目立たない。

(木村) もしくは、2人くらいだったら登壇してもらってもいいかなと思っていたのです。私が質問を振るので。

—— そうですよ。自由に話すわけじゃないから。

(木村) そうです。会場から質問が来ても、それにパッと答えるんじゃなくて、私が一旦受けて、経由して、バランスを取るのです。

—— ああ、会場とのディスカッションというのは、そういう形ですか？

(木村) そうです。

—— でも、質問をあらかじめもらっているから、いきなりはないわけですよ？

(木村) ないです。基本的には質問は仕分けしてやります。

—— この70分間の会場の設定はどんな感じなんですか？ 壇上にテーブルを並べる？

(木村) 椅子とテーブルを並べます。

—— で、前に何人座るんですか？

(木村) それを、今検討しているわけです。4人だったら絶対無理だけど、2人だったら入ってもらって、これはちょっと生の声を言ってもらったほうがいいなと私が判断すれば、それを話してもらおうし。という感じを考えてはいたんですけどね。

—— パネルに登壇するのは、前半でお話する方と同じ人ということですよ？

(木村) そうです。

—— 私は逆に、もう1人いたほうがいいんじゃないかと思ひまして。4人が発表して、パネルディスカッションのときにも、4人が出てもいいんじゃないかという感じがするのです。1人だともものすごく孤独だと思いますよ。

(木村) 2人はいるので。市民と専門家と2人なので。

—— まあ、アンケート結果にも、仲間を大切にしたいと書いてありましたから、そういう意識はある程度はありますけどね。

—— 自分が代表でしゃべるっていうのは、一般の方は、たぶんすごく不得意だと思うのですよ。事前に質問があったとしても。

(土田) 私が記者として会場にいたとして、ディスカッションが始まりますよね。壇上に専門家の方と一般の方が 2 人いて、非常に親密に仲良さそうにやっていました。それを見ただけで、ああ、なんか、垣根が取れたんだなって思いますね。案外そんなもんじゃないかなって気がするんですよ。

—— 逆にやらせみたいに思われるかも。そんなうまくいくのかなって。

(土田) 逆によそよそしくされたら、ああ、やはり無理なのかと。我々が話す内容よりも、壇上でその 2 人がどう振舞うかで、聴衆の印象が決まってしまうような気がしますね。

—— それはそうだと思いますよ。

—— 目から来る印象は大きいですよ。

—— まあ、そんなに素直な人ばかりではないから、木村先生、土田先生のプレゼンと、参加者の意見との食い違いを、一生懸命、耳をそばだてて聞くでしょうから。

(土田) そうでしょうね。

(木村) まあ、食い違うでしょうし。

—— それでいいと思うんですよ。それで十分だと思うんです。

—— 来た質問に対して、首都圏の方と、専門家の方と、他に壇上にいらっしゃる方と、先生が振るわけですよ。この質問はこの人、みたいな感じで。

(木村) そうです。

—— 事前に集めた質問はでしょう？

(木村) その後会場からあったとしても、例えば、「市民の参加者に質問したいんですけど」とあったら、私のほうで一旦引き取って、この部分については話してもらいましょう。でも、例えば、「他にどういう人がいたんですか」というところは土田先生に話してもらいますとか、こちらで仕分ける予定です。そうじゃないと、ただの感想と、学術的に分析した結果がごっちゃになると大変なので。

でも、肌感覚が知りたいというような質問であれば、やはり話してもらったほうがいいかもしれないですから、振るのはありかなと思っているのですけどね。

—— 私も、参加者に発表してもらって、ディスカッションのときも質問が来たらちゃんと振るといふ、素直なやり方でいいと思うのですね。

もしそこで、進行方法がおかしいとか、運営に関する不満みたいなものを話してしまう場面があったとしても、いくらいろいろと状況を作っても、ちょっとしたことで参加者にそういう気持ちを与えてしまうということで、公平な場作りがどんなに大事なとか、改めて分かったということ言えばいいわけで。

(木村) そうです。それなので、最後に私が次年度に向けての課題と抱負をちゃんと言う時間を取ったのです。ディスカッションしてそれで終わってしまうと、またちょっと違うものになってしまうので。

(土田) 今年はいいわけですよ。パイロットスタディだというスタンスに立つことも可能なわけだから。

(木村) そうです。

—— 私、だいぶ前に講演会とか、いろいろやったんですけど、事前に質問をくださいって集めたのですよ。会場から質問してくださいと言ったんですけど、半分以上は、書いている以外の質問をしているのですよね。集めているにもかかわらず。

自分の主張したいこともあると思うんですけど、だけど、それはいただいていませんから、とは断れないのですよね。

(土田) あります。私も別のところで、カラオケと同じで、マイクを握ったら話さない人がいる。自説を延々としゃべって。

(木村) そうですね。

何人集まるかによるけど、定員は一応 150 人にしていますけれども、質問を書いてくださいって言うと、結構出てくるのですね。この方法はよくやっているから分かるけど、す

ごい出るのですよ。70分では処理しきれないくらい。なので、それに丁寧に対応していくと、実は時間はほとんど残ってなくて、再度会場から質問をいただくのは、10分取ればいいかな、くらいになるのですね。

—— 会場からのご質問は、ということで、手を挙げさせて聞くんですか？

(木村) 最後の5分くらいは。時間があれば。

—— 紙に書いていただいた質問を仕分けるのは、どれくらいの時間があるんですか？

(木村) 休憩で頑張る。休憩と、あとはコメントの間。だから30分くらいですね。

—— パネルディスカッションのパネラーは、何人くらいを想定していらっしゃるんですか？

(木村) 基本的には講演した人ですね。あとは、元気ネットさんは何かしゃべることはありますか？

—— 「フォーラム実施状況の紹介」のときに、竹中さんが状況を説明してくださるということであれば、その後に、サブファシリテーターとして、元気ネットの代表が5分くらい話させていただくとか、そういうのはいかがですか？

—— 5分では短すぎるんじゃないですか？

—— でも、私たちは研究の応援団です。私たちがあまり理論的なこととお話するわけではないので。ただ、最初からこの研究に参加してきたものとして、こういう場で5分でも時間をいただければ大変うれしいと。

(木村) 私は、あったほうがいいと思っているんですけど。ただ、私が勝手に書くのもどうかと思うてハテナだったのですが。で、そこで報告してもらったら、そのままパネルディスカッションにも登壇してもらおうと思っているのです。

—— 10分ぐらいでもいいと思いますけど。

(木村) あと、順番ですけど、竹中君のあとのほうがいいですか？ それとも、フォーラム参加者の後、はおかしいか。やはり竹中君の後ですね。では、連名で出しておきましょう。

ようか。

(土田) それがいいと思います。

(木村) 30分、10分でいいですね。

(土田) それとも、独立したテーマで、元気ネットさんのほうから話すほうがいいですか？

—— 研究の中でどういう部分を求められているかによると思うんですけど。

(木村) 研究っていうよりは、そもそもこの時点ではまだ分析が終わっていないと思うのですよ。だから、実際にやってきたことを、ある意味では淡々と報告すると。

竹中君は観察者の立場から報告をして、元気ネットさんには、サブファシリテーターとして、グループワークにかなりコミットしていただいている立場から、どういうことだったか、というのを話していただくといいかなと思うんですけど。

—— フォーラム参加者のコメントの前ですから、フォーラム参加者のコメントが、より生き活きと感じられるような部分を入れたほうがいいですよ、たぶん。そういうのを通して、こういう感想を持ったんだな、みたいな。

(木村) ハードルをあげましたね (笑)。

—— 皆さん、一言ずつ原稿を書いてくださいよ (笑)。

(木村) それで、フォーラム参加者はどうしましょうか。4名ですか？ 2名ですか？

—— 私は4名という感じがするんですけど。

(木村) 4名にしますか。4名を予定していて、いろいろあればもしかしたら2名になるかもしれない、という形でやりましょうか。

—— 私も多いほうに賛成なのですよ。なぜかというと、今までのアンケート等の中身を読むと、やはり参加者の人たちの意見のほうが、我々の研究で狙っているような意識に近づいていると。

(木村) そうですよ。

—— おそらくこのシンポジウムに来る大半の人はそうではなくて、「原子カムラ」に関心があって来るのですよ、おそらく。

で、木村先生の発表にしても、参加者のコメントにしても、原子カムラについての話はほとんど出なくて、フォーラムの意義について語ると思うのですね。そこに大きなずれがある。

木村先生はもちろん研究の話としてされるけど、聞き手のほうは、そうじゃない、私たちが聞きたいのは研究じゃなくて、原子カムラの話だよ、と思っているときに、参加者の人の生の声でフォーラムの雰囲気語ってくれれば、より強く、聞き手に、ああ、違うなと。原子カムラの話を知りたいと思ってきたけれども、フォーラムって、そんなものなのかと。へえー、そうなのかと。そういう気づきを期待できるかもしれない。それは、そういう生の声がたくさんの方が期待できる。たぶん、誰が選ばれるにしても、そういうことを語ってくれそうな気がしますよ。

(土田) そうですね。

—— ただ、原子力学会員のほうがちょっと心配ですけどね。

(土田) 場合によっては、一般人 2、専門家 1 でもいいじゃないですか。

(木村) そうですね。だから、2名から4名くらいですよ。

—— 私は、次回に期待していて。第4回の時点で、ギャップがあるという認識をしていて、それで次回、知識を供給することじゃない、人間関係を作る、信頼関係を作るのほうがよく大切なんだっていうところまで気づきが進化してくれていることを期待しています。

—— 私は、変わらないんじゃないかと思って。

(木村) 可能性はありますよね。でも、人前で話すときに、自己反省的なことを言ってくれば、それはそれでいいかなという気もします。

では、そういう方針で、できるだけパネルディスカッションにも登壇してもらって、私のほうで振るので、そういう形でやっつけようと思います。

第5回フォーラムで、ある程度、こういう形でやりますということも皆さんにお伝えをして、その上で登壇者を、投票みたいな形で決めようかと思っています。

—— 開票はどうするのですか？

(木村) 開票は、その場ではしなくていいかなと思うんです。それはまた違うかなと思って。これはこちらで預かって、運営のほうから連絡を取らせていただいて、決まったところで決めますという形にしようと思いますので。

—— そのときのやり方ですけども、今、最大 4 名選ばれる可能性があるということなので、専門家 2 人、一般の方 2 人を推薦してください。そこに自分を含めても構わないから書いてください、というような形で。

(木村) そうですね。2 名ずつくらいがいいかなと。

(土田) それがいいと思います。

(木村) 4 名書いてもらうんですよね。

—— はい。そうです。そうすると、たぶんうまくいく。

(木村) そうですね。では、そういう方向で次回はこのシンポジウムの説明もして、登壇者の話もしたいと思いますので、よろしくお願いします。

ということで、ここで少し休憩を入れましょうか。14 時半から開始したいと思います。

3. フォーラム終了時のアンケート等について

(木村) それでは、続きをやりたいと思います。次は、フォーラム終了時のアンケートについてということで、土田先生から紹介をしてもらって、ディスカッションに入りたいと思います。

(土田) 終了時のアンケートは F5-6 ですね。まず表紙からなのですが、前回ここで打ち合わせた通り、中ほどに下線が引いてある通り、持ち帰ってもらいます。ご自宅にお帰りになってから書いていただいて、返信用封筒をつけることになりますが、それに厳封の上、返送してほしいという形になります。事前アンケートと同じように、記名式になります。

事前アンケートと同じように、前半は、1 月にやった調査がかなり続いていきます。

関心。不安。原子力発電に対する考え。福島第一原発に関連するもの。電力割合がどう

であるか。放射能・放射線についての考え。それから、ムラに関わるわけですが、携わっている人たちや組織に対する考え。省エネ。それから、電気料金を上げてもいいか。

その次からが、フォーラムに関連することになります。10 ページからは少し見ていただきたいと思います。前回も少し見ていただきましたが、ご意見を反映して、手直しもしました。

まず、ムラというものがあると思っているのかどうかを聞きたいというご意見がありましたので、Q18. あなたは、現実的な実体として「原子カムラ」というものが存在すると思いますか。1. 「原子カムラ」という言葉があるだけで、現実にはそのようなものは存在しない。2. 「原子カムラ」は現実にあるのだと思うが、その具体的なイメージは思い浮かばない。3. 「原子カムラ」は現実存在するし、その具体的なイメージも自分は持っている。結構粗っぽいですが、この3択でつけてもらおうかと思います。

Q19 は、「原子カムラ」と世間で呼ばれているものは何だと思いませんか、ということにしました。Q18 で、「原子カムラはない」に丸を付ける人もいたので、まあ、世間で言われているじゃないですかということ聞いています。大抵のものに、「の人たち」をつけて、組織というよりは、人間だという方向になるべくやりました。ただ、4 番の「差別用語」とか、15 番の「特権組織」など、そうせざるをえないようなものもあります。19 番の「原子力関係者の家族」も迷ったのですが、やはり家族も十把ひとからげに巻き込まれているという意見がありましたので、それを尊重して、つけるならつけてくださいという形で残しておきました。

Q20. 「原子カムラ」に悪い点があるとすれば、どのようなことだと思いませんか。これは前回とほとんど変わっていませんが、11 番に、「原子カムラ」に悪い点はない、というのをあえて入れました。

Q21. 「原子カムラ」と一般の人々との間に境界があると思いませんか。1. 「原子カムラ」と一般の人々との間には境界があると思う。2. どちらかといえばあると思う。3. どちらかといえばないと思う。4. ないと思う。という形の4択です。

Q22. 原子カムラと一般の人々との境界があるとして、それを越えることができますか。1. 越えることができると思う。2. どちらかといえばできると思う。3. どちらかといえばできないと思う。4. できないと思う。で、5 番に、そもそも「原子カムラ」と一般の人々との間に境界はない、という選択肢も用意しておきました。

Q23 は自由回答ですが、Q22 で越えることができるというところに丸をつけた人だけに聞くのですが、どうすれば越えることができると思いませんかという形で、具体的に書いてもらう。

Q24 は、Q22 で越えることはできないと答えた人だけに聞いて、なぜ越えることができないのかということを書いてもらいます。

次のページです。この辺は、そういえばこういうことを聞いていなかったなということに入れさせてもらいました。順番にいきます。

Q25. あなたは、このフォーラムに参加したことによって一般の市民に対する印象が変わりましたか。これは念のため申し上げますが、言葉が足りないようだったら補いますけれども、一般の市民の方にもこれを答えてもらいます。1. 一般の市民に前よりよい印象を持つようになった。2. どちらかといえばよい印象を持つようになった。3. 印象は変わっていない。4. 前よりどちらかといえば悪い印象を持つようになった。5. 前より悪い印象を持つようになった。という5択です。

Q26 は、原子力専門家に対する一般的な印象は変わりましたかということで、選択肢は同じです。これも先ほどと同じように、念のためですが、原子力専門家の方にも答えていただきます。

Q27. あなたは、このフォーラムに参加したことによって一般の市民に対する理解がより深まりましたか、それともフォーラム参加前と変わりませんでしたか。1. 一般の市民に対する理解がより深まった。2. 一般の市民に対する理解がどちらかといえばより深まった。3. 一般の市民に対する理解はどちらかといえば参加前と変わらない。4. 一般の市民に対する理解は参加前と変わらない。ということで、前と変わらないのか、深まったのかという形で4択にしてあります。

Q28 は、その原子力専門家版です。

Q29. あなたにとって、このフォーラムに参加したことは有意義でしたか、それとも有意義ではありませんでしたか。1. 有意義だった。2. どちらかといえば有意義だった。3. どちらともいえない。4. どちらかといえば有意義ではなかった。5. 有意義ではなかった。という5択にしてあります。

Q30. あなたは、このフォーラムに参加してよく議論ができましたか、それともあまり議論ができませんでしたか。1. よく議論することができた。2. どちらかといえばよく議論することができた。3. どちらかといえばできなかった。4. できなかった。ということを知って、1、2、議論することができたという人だけにサブクエスションとして、その相手は、一般市民の参加者でしたか、原子力専門家の参加者でしたか、ということで、1. 主に一般市民、2. 主に原子力専門家、3. 両方とも、という形でつけてもらうことにしました。

Q31. 他の参加者に自分の考えや思いを伝えることができたと思ったことがありましたか、それともありませんでしたか。1. 伝えることができたと思うことが何回もあった。2. 伝えることができたと思うことがあった。3. できたと思うことはほとんどなかった。4. できたと思うことはまったくなかった。これは論理的に少し無理があるんですけど、まあ、これで走ってみようかと思っています。これもサブクエスションで、その相手は誰でしたかということで、一般市民なのか、専門家なのか、それとも両方ともだったのか。

次の**Q32** は、今度は、他の参加者の考えや思いに共感することができたと思ったことがありましたか、と聞いています。選択は同じで、1. 共感することができたと思うことが何回もあった。2. できたと思うことがあった。3. ほとんどなかった。4. まったくな

かった。できたという人に対して、その相手は一般市民でしたか、原子力専門家でしたか、それとも両方でしたか、と聞いています。

Q33 ですが、これは少しトリッキーな質問です。やはり、先ほどの議論でも、説得するんだという思いを捨てきれない人がいるみたいですから、ちょっと入れてみました。他の参加者から説得されたと思ったことがありましたか。「説得できたか」と言うと、説得することが目的だなど誤解されるといけないので、自分が説得されたと思ったことがあったか、ということだけに留めてあります。1. 何回もあった。2. あった。3. ほとんどなかった。4. まったくなかった。これもサブクエスチョンをつけて、その相手はどちらでしたかと聞いています。

—— 面白いですね。

(土田) Q34. フォーラムに参加して、他の参加者から新たな発見をしたと思ったことがありましたか、それともありませんでしたか。1. 何回もあった。2. あった。3. ほとんどなかった。4. まったくなかった。また同じサブクエスチョンをつけていて、あったとしたら、それは誰からでしたかということをやっています。

最後に自由記述で、Q35. 良かった点があれば挙げてください。Q36. 改善すべき点があれば挙げてください。最後のページで、自由にお書きくださいという形のアンケートを一応設計してみました。

(木村) ありがとうございます。そうしたら、意見、コメントがございましたら、どうぞ。

—— Q33「説得されたと思ったことがありましたか」という意味は、自分が説得の対象となっているな、今説得を受けているな、と思った。そういう瞬間があったかということなのか。それとも、相手が一生懸命説得してきたことに、ああ、やはりそうですねっていうふうに、その人の意見に説得され切って、同意してしまったということか。どういう意味ですか？

(土田) 元々は後者で考えていたのですが、今お聞きして、されそうになったというのも面白いなと思いました。「説得されかけたことがありましたか」とか。ちょっと変かな。そういう試みを受けたか、というほうがいいのかなど、ちょっと思ったんですけど。

—— 私は前者だと思いました。

(木村) 私も前者だと思いました。

(土田) では、それがより分かるようにしましょうか。確かに、自分が説得されたなんていうのは、全然いないという形で、誰も丸をつけない質問はやる必要のない質問ですから。「されかかった」のほういいですね。

—— 「説得しようと言われた」とか。

(土田) ああ、いいですね。他の参加者から説得しようと言われたことが、

—— 説得を受けたとか。

(土田) 「説得を試みられたことがありましたか」。ちょっと硬いか。

—— 質問なのですが、「議論をする」と、「説得をする」とは、どう違うのでしょうか？

(土田) 「議論」というのは、こちらからも反論できるけど、「説得」というのは、基本的に有無を言わせず、だと思えます。反論できないでしょう、だから私の言うことを聞きなさい、みたいなのが、たぶん「説得」。

—— 上から下という感じですよ。

(土田) はい。やはり上から目線ですね。Q33 はちょっとトリッキーですかね？

—— いろいろな取り方がありますよね。

(土田) やめてもいいかなという勢いなのですが。

—— でも、いい試みじゃないかと思うのですよ。

(土田) そうですね。では、前者の意味でいくなら、「他の参加者が、自分を説得しようとしていると思ったことがありましたか」。

(木村) それがいいと思います。

—— それなら分かりやすいですね。

—— Q33 を入れることによって、このフォーラムはそういうことを意図していないという
ことを伝えたいというところに意味があるから、トリッキーでも入れておいたほうがいい
いかもしれませんね。

(土田) はい。では、「他の参加者が、自分を説得しようとしていると思ったことがあり
ましたか」でいきます。

—— それを選択肢の3番に入れて、選択肢を5つにするとか、そういう感じでしょうか？

—— いや、そうじゃないでしょう。

—— そうすると、ああ、説得されたなっていうのは？

(土田) それはQ32の「共感することがあったか」で測れますので。

—— 「他の参加者が、自分を説得しようとしていると感じたことがありましたか」。「感
じる」という言葉のほうがいいかなと思うんですよ。

(土田) なるほど。これは「感じた」にしましょうか。

—— それは、「何回もあった」ですか？

(土田) ええ、「何回もあった」。

(木村) たぶん何回もあるんじゃないかな。

—— 専門家から市民、ではないのがあったとしたら、

(土田) それはあってもいいんじゃないですか。いや、あると思いますよ。一般の市民
から、「もう原子力なんてやめたほうがいいんだ」という説得を受けたと思っている。そう
いう人だっていると思います。

—— あと、一方的だったら一方的で（専門家→市民だけだったら）、それがまた課題です
よね。

(木村) アンケートでは聞けないかもしれないけど、どういう内容で説得しようとして

いましたかって、聞きたいですね。

(土田) もしこれが出たら、インタビューで。

(木村) 間に合わないような気がしますけど。

—— 前回は質問したのですが、選択肢が4つの場合と5つの場合と、そういう違うがある理由は、読んでいくと分かるのですけれども、あとで集計をされるときに、それは影響はまったくないのですか？

(土田) ないです。まったくないというか、そもそも理系の人たちの感覚から言ったら、15とか20なかったら、こんなものは数量で扱えないだろうというのを、無理やり4とか5でやっていますので、五十歩百歩です。

—— 分かりました。

—— 一般の人々という意味の言葉を、Q21では「一般の人々」と書いてあって、Q25では「一般の市民」と書いてあるのですけれども、これは意図的に使い分けていらっしゃるのですか？

(土田) いや、意図的ではないです。

(木村) Q20の選択肢には「一般の人たち」というのがありますね。「人びと」という表記もある。

(土田) どうでしょう、統一したほうがいいと思いますけれども、私はどちらでも構わないです。

—— Q21は、原子カムラと「一般の人々」で線を引いていて。Q33は、「一般市民」と原子力専門家で分けている。

(土田) いわゆる参加者の言い方としては、一般市民という言い方をフォーラムでも使っていますよね。ですから、それを踏襲しようとして、Q33の辺りは「一般市民」という使い方をしています。

ただ、難しいところなのですが、例えばQ25の辺りは、フォーラム参加者も含まれるけれども、特にフォーラム参加者だけ聞いているわけではなくて、普通の人たちのことを聞

いているということなので、「一般の人々」と言ったほうがいいかもしれません。

だから、フォーラム参加者に「一般市民」という言葉を使うと、すっきりするかもしれません。

(木村) 「人びと」で統一でいいような気がします。「人たち」でもいいかなとも思ったのですが、人たちというと、なんか、ちょっと違いますかね。あまり聞かないですよ。

(土田) そうですね。では、「人びと」にしましょうか。

ただし、Q30以降のサブクエスションは「一般市民」のまま残そうと思うのですが。

—— フォーラムでは首都圏住民という言い方をしているような。

—— フォーラムの名簿上は、首都圏参加者、原子力学会参加者ですね。

(土田) 名簿上はね。さて、どうしたものでしょうか。いや、つまり、答えてくれる人がいつも使っている言葉でいきたいのですよ。

—— 一般市民の参加者とか。

—— Q30の言い方は、私は引っ掛かりはないから、これでいいと思うのですが。

(土田) これはこのままでいきますか。

—— ギャップは感じませんね。

ただ、前のほうは統一したほうがいい気がします。

(土田) では、サブクエスションだけはこのままで、あとは市民という言葉を使わないで、「一般の人びと」という言葉に変えます。

(木村) 「人たち」も「人びと」でいいですか？ Q20の4番は、Q19で「人たち」という形をいっぱい取っているんで、たぶんそれを引っ張っているんだと思うのですがけれども。

(土田) Q20の選択肢4は、「人びと」に変えます。

(木村) Q19は、「人びと」だとおかしいので。

(土田) そうですね。ここは「人たち」なのですね。

(木村) ここは「人たち」のままということですね。で、あとは「人びと」。

—— Q25 は？

(木村) これも「人びと」ですね。

(土田) はい。「一般の人びと」です。

—— 参加者だけではなくて、広く一般でいいということが明確に分かったほうがいいわけですよね？

(土田) そうなのです。前回も少し議論になったのですが、明確に書くとすれば、「フォーラム参加者に限りません」みたいな後書きをつけるとか。文章の中に組み込めばもっと丁寧なのですが、でも、「フォーラム参加者以外の人も含む、一般的な」みたいなのは、ちょっとね。

—— 「フォーラム参加者に限らず、一般の市民」とか。

(木村) そこまで書くと、調査としては、もったりしている気がするのですが。大丈夫ですか？ そうやることによって、何か無駄な誘導を与えたりしていませんか？

(土田) うーん。誘導かどうか。これは感覚的な問題なのですが、私の感覚だと、後ろに、「フォーラム参加者に限りません」とつけておくのが無難な気もするのですが。つまり、文章が長くなると、一番反応しなければならない部分がどこか分かりにくくなるのですよね。

—— フォーラム参加者の印象が変わった場合でも、一般市民全体の感覚が変わっても、どちらでもいいということですよね？

(土田) そうです。だから、フォーラムに参加している人が、その他大勢を代表して見えるならそれでいいし。逆に、フォーラムに参加した人たちは特殊な人で、一般の人は別だよなと思うなら、それでもいいし。同じことは原子力学会員にも言えることで、フォーラムに参加した専門家は特殊な人で、他の人は別だと思う、でもいいし。この人と同じな

んだらうなと思ってくれてもいいし。

—— チェックをつける人が悩まないようにしておいてくれれば。

(土田) ここは、本当に手厚くやるなら、それを分けて聞くのですよ。フォーラムに参加した市民の方はどうでしたかと聞いた後で、フォーラムに参加していない一般の人びとはどうだと思いませんか、という形で。原子力専門家も同じやり方で。印刷費は大したことないので。あとは、答えてくれる人がついてきてくれれば、それでやるのが一番いいのですが。

(木村) すでに 16 ページあるので。これは多いですから。

(土田) 多いですよ。答えたことのあるようなものなので、それでも苦労は少ないとは思いますが、あらかじめ言っているように、たぶん、真面目にやったら 1 時間はかかります。

—— すみません、先に表記上のことなのですが、Q21 から Q24 までで、原子カムラに鍵カッコがついたり外れたりしているのですが。

(土田) できれば全部つけたいので、あとで細かく指摘してください。

(木村) たぶんつけたほうがいいと思います。そこは記入漏れだけだと思うので。

(土田) はい。では、原子カムラは、全て鍵カッコをつけるという形で。

—— すごく細かいことなのですが、Q4 なのですが、「いくべき」と「ゆくべき」が混ざっています。古いものをどんどんバージョンアップしていると思うので、こういうのは着実にひとつずつ取っていったほうがいいと思います。

(木村) これは直した気がしたんだけど…。私が「ゆく」という言葉が好きなので、「ゆく」にしているんだけど、本当は文語は「いく」が正しい。口語だと「ゆく」でいいんですけど。

—— Q21、Q22 で、原子カムラの境界について聞いているけど、厳密に言うと、その人が感じた原子カムラの定義と、フォーラムに参加している専門家とに重なりがあるかどうかを最初に質問するべきだと思うのです。

議論して境界を越えられるかどうかというのは、原子カムラの人ではなくて、フォーラムに参加した人たちに対する印象しか持っていないはずなのです。要するに、フォーラムに参加した結果、越えられるか、越えられないかということなので。

私は、個人的には、フォーラムに参加した人は、誰も原子カムラに入っていないと思っているので。

(土田) そこが、このフォーラムの少しぼやっとしたところというか、おっしゃる通りなのです。本当にこれをやるのであれば、名札をつけて、「私は原子カムラです」と宣言する人が出てこないといけないはずなのです。ところが、原子力の専門家だとは言っているものの、本人も、それから他の人たちも、あなたは原子ムラですね、という定義は一度もしていないのです。

—— ちょっと余談になってしまっただけ縮なのだけれども、おそらく、参加している学会員の人に、あなたは原子カムラの一員だと思いますかと聞いたら、全員、私は違いますって言うのではないかな。

—— でも、会話の中では、意外と皆さん、自分は原子カムラだけど、っておっしゃいましたよ。

—— 自虐的な感じかもしれません。

—— まあ、このフォーラムが原子カムラを越えられるかというテーマだから、その住民でなければ呼ばれないだろうと。そういう意識かな。

(土田) それをアンケートに入れてもいいと思いますよ。「あなたは原子カムラの一員だと思いますか」という質問。専門家だけにお聞きしますと。で、一般の方には、「フォーラムに参加した専門家の方々は、原子カムラの住人だと思いますか」という質問もできます。

—— 第1回のグループワークのまとめがあったじゃないですか。あれの中で、やはりいろいろな定義があっただけじゃないですか。例えば、甘い汁を吸っている人たち。フォーラムに参加した学会員の人たちの中に、自分は甘い汁を吸っていると思っている人がどれだけいるのかなど。

—— いや、自分は甘い汁は吸っていないけど、やはり原子カムラの仲間なのかな、っておっしゃっていましたよ。

—— やはり、ご自分の所属しているところが原子カムラだろうと。そこにいる自分がど

うかと問われると、白黒はっきりはさせられないけど、所属しているところは、皆さんから見たら原子カムラじゃないかなって。

—— その辺りの話が、次回、第 1 回よりも明確に出てくるかもしれないですね。それは面白いな。

(土田) どうしますか。入れますか？ 入れるとすると、「自分は原子カムラの一員だと思いますか」という質問と、それから、「自分は原子カムラの一員だと見られていると思いますか」という質問がありますね。

—— 後者だと思うなあ。

—— でも、両方必要ですよ。

(土田) では、専門家だけに、これを聞きましょうか。

(木村) 我々運営陣は？ 「フォーラムの運営陣は原子カムラの一員だと思うか」。

(土田) では、運営陣もアンケートに答えますか？

—— 私も、先ほどからこれを見ていて、私が答えるのも面白いなとも思って読んでいたので、ぜひ、運営陣の答えを。

(木村) あと、私は、フォーラムの参加者が我々をどう見ているのかは知っておきたいのですよ。

—— それも面白いですね。

(土田) 面白いですね。では、我々のことを何といいますか？

—— フォーラム運営スタッフ？

—— 我々全部ですか？

—— ええと、元気ネットがこれに参加しているのは、原子カムラときっと思われるであろう専門の研究者の皆さんと、一般人側の NPO が、両方で連携して研究をやることで、

何か中立性とか、バランスを保つっていう、そういう構図ではないかと思っていたのですが。

(木村) 私たちもそう思って設計はしていますが、受け手がちゃんとそう見ているのか。

—— だけど、最初にそういう説明をしましたっけ？

(木村) それはしていません。

—— 質問したからといって、じゃあどうするんだっていうのはないような気がするんですけど。

(木村) ないですけど、ああ、そういうふうに見られていたんだ、というのは知っておいたほうがいいかなと。どうせ、次回も同じに見られるわけですから。ここの体制は変わらないので。

(土田) ちょっと待ってください。やはり参加者の目から見て、木村先生はじめ、いわゆる研究者の人と、それとサブファシリテーターの方々と、それを同じ土俵で評価してもらうのか。分けるのか。

—— 分けて質問しないとおかしいかな。

—— あと、このフォーラム自体を聞かないのですか？ フォーラム自体の枠はどう感じましたか、っていうのは。

(木村) まあ、インタビューでは聞くのですが。

—— でも、最後に、フォーラムの良かった点と、改善すべき点と、自由なメッセージの欄があるから。

(木村) あと、終わった後に毎回聞いているので、そこでは取れているかなと思うのですよね。

(土田) でも、それをやるには覚悟がいますね。「フォーラム自体が特定の意見を持っていたように思いますか」みたいな質問は考えられるのですが、不用意にそんな質問はしたくないですね。

—— 私は、ないほうが良いと思うのです。これでもってどうしないといけないか、という結論に持っていけないですから。

(木村) では、インタビューのほうでさらりと聞くほうが良いですか。

(土田) それはかなり自信がついてからでいいと思います。やるなら来年です。

—— 具体的に設問を起こすと、そういえばそうだな、ってこともあるでしょうから。

—— こういう話し合いをすると、必ず、子供に対する教育と、それから情報源という話が出てくるじゃないですか。

教育というのは、良し悪しはともかく、一律にできるのですよね。基本情報みたいのを小さいときから教えて、覚えているかどうかは別にしても、一律にできる。

一方で、大人は、今回フォーラムに参加して、このあいだの資料も、資料を提示してきた方もいらっしゃるし、今まで見た知識の中から文を書いていた方もいて、まったく分かりません、という人はなくて、皆書いていらしたわけですね。

そうすると、そういう大人たちが集まって話すときに、いつも、その人の意見はどこで形成されたのかなって思うんですよ。間違っただけ、正しいことも、どこで形成されたのか。市民についても。専門家の方は、何を信じて、はっきりものをおっしゃっているのかな、と、思っています。

そうすると、自分の今の意見、考えを形成したものが、もし重なっている面があったら、そこで話し合いが成り立つようにすればいいんじゃないかなって思っています。皆、土俵の違うところで知識を得ているのを、一緒に話し合うのは、すごく難しいような気がして。

(土田) これはもう、新たな研究を立ち上げるくらいの大いテーマですね。

—— いや、単に、ニュースですか、新聞ですか、雑誌ですか、くらいで聞いてもいいかなって思っています。

(土田) 情報源を聞く、という研究はあるのですよ。市民の方だと聞きやすいんですけどね。原子力についての知識は、主にどこから得ていますか、という形で、テレビ、新聞、雑誌、インターネット、あるいは会社の同僚、家族、という形で並べていくのですね。

専門家の場合は、ちょっと諸葛先生辺りにインタビューしないと選択肢が挙がってきませんけれども、会社の仕事でとか、学校で習ったとか、あるいは学会の論文とか、まあ、並んでいきますよね。

その質問を入れておく、というのはひとつありうるんですよ。ただ、これをまともにやると、それだけでひとつの研究テーマになってしまいます。

—— 今のご質問に関しては、原文振が毎年アンケート調査をやっています。

—— どれを信用していますか、というのも出ていますか？

—— この前、原子力委員会で、我々と原文振が呼ばれて、我々のアンケート結果の説明と、原文振の説明とを続けてやったんだけど、明解ですよ。

一般の方の情報源は、ほとんどがマスメディア。新聞、テレビ。一方で、メディアから情報をもらっているという専門家はほとんどいない。それはだから、全然違いますね。

—— じゃあ、重なっていないのですね。

—— そうです。専門家の大半は、マスメディアはいいかげんなことを書いていると思っているのですよ。そこにやはりギャップが存在しますね。

(土田) 案外、原子カムラのひとつの原因は、そこかもしれませんね。専門家の人たちは、マスメディアが何も分かっていないと思っている。自分たちは特殊な情報の基で動いていると思いつくところがある。だから、ちょっと言葉が悪いですが、専門家の人たちしてみると、一般の人たちが、教祖に動かされている信者のように見えるのですよ。

(木村) 土田先生、それで科研出してみたらどうですか。

—— これは実はものすごい根の深い問題ではあるんです。

ものすごく乱暴に言いますと、原子カムラの中のある特定の情報源から情報が発せられて、それ以外のことを言うてはいけないという集団があつて。だから、原子力の専門家の中に、画一的な情報でコントロールされている集団があつて、その情報源にコントロールされている部分が原子カムラだというのが、私の認識です。そこには、原子力の専門家以外の人も入っていたりする。これは私の認識ですよ。で、その情報にコントロールされている人たちが原子カムラという、いわゆる、悪しき原子力集団というのがある。

原子力の専門家の中でも、そういうコントロールタワーの情報に縛られずに、もっと広い視野でものを考えている人もたくさんいる。だから、そういう人は、私の定義では、原子カムラじゃない専門家。

この構造を私が意識したのは、実は今から 10 年ほど前に、アメリカ人から言われたのですよ。日本の原子力界を眺めると、ある一点から情報が発せられて、それが全体をコント

ロールしているというのは、もうアメリカでは常識だよと。この黒幕の一員がお前じゃないかと言われてまして。それで、学会で少しその議論をしたんだけども。

そのひとつが、国会事故調が指摘した虜ですよ。規制がまさに事業者から虜にされていたというのは、今言ったコントロールタワーから規制が完全にコントロールされていたと。

だから私は、そういうことの起きないような仕組みは、別に規制に限らず、作らなきゃいけないので、そういうことをきちんと学際的に解明するのは価値がある話だと思います。

(土田) では、科研を出してみましようか。ご協力いただいて。

(木村) そうですね。少し次につながるようなことをやってもいいんじゃないかと。

—— 今回のフォーラムを受けて、そういう調査の必要性を感じたと。

(木村) 結構いけるかもしれないですね。問題設定が面白いところに出てきそうですから。まあ、ここで話す議論ではないと思うので、ここまでにしたいですけども。

—— 一点だけ、関連して言うと、どこから情報を得るかというのは、原文振より前からずっとやっていたのですよ。国際間で、特にアジアの、日本も入って調査をやっている。日本では、2002年と2010年にやっています。

2002年は高校生を対象にしたのですが、新聞とラジオだったんです。ところが2010年はテレビなのです。新聞は、3番目、4番目くらいになって。

(木村) 2002年はテレビだったような気がしますけど。

—— テレビも入っているかもしれませんが。ただ、マスコミの中で、メインは、原子力は新聞から読むと。

—— 今は、それにインターネットが入っているでしょうね。

—— 2010年はテレビがトップなのです。2番目がインターネット。3番が新聞。それはだいたい世界共通なのです。アジアですけどね。

それで、どこの情報が信頼できますかって聞いたのですが、共通して、IAEAという国際機関を信用すると。2番目が専門家とか、研究所。

—— その調査の対象は誰ですか？ 一般の人じゃないでしょう？

—— 高校生と大学生ですよ。

(木村) いや、私たちの調査だと、IAEAはそんなに信用されていないですよ。

—— 一応選択でやっているんですけども、そうなっているんですよ。

(木村) たぶん、それは国際的な調査だからですよ。日本とはまた違う気がします。

—— 日本もIAEAですよ。それで、私が言いたいのは、国とかマスメディアは全然信頼されていないのです。

(木村) あの、この話はもうここまでにしめよう。アンケートの話に戻りたいと思います。終わらなくなるので。

—— Q32は、「あなたは、このフォーラムに参加して、他の参加者の考えや思いに共感することができたと思ったことがありましたか」と聞いているんですけど、「他の参加者の考えや思いに共感したことがありましたか」ではいけないのですか？ というのは、「共感することができた」というと、「共感したほうがよい」というニュアンスが含まれているように感じるんですけど。

(土田) 分かりました。では、「共感したことがありましたか」にしたほうがいいですね。

—— なんか、すごくさっぱりさせてみたんですけど、大丈夫ですか？

(土田) 大丈夫です。

—— Q34なのですが、「フォーラムに参加して、他の参加者から新たな発見をしたと思ったことがありましたか」という気づきの質問なのですが、他の参加者から気づいたわけではないんだけど、このフォーラムに参加したことで、新たに発見したこともあると思うのです。この調査ではどちらを聞くんだろうなと思ひまして。

(土田) 私は、サブクエスチョンをつけているように、

—— どのように影響をされあったか、ということを知っているのですね。

(土田) そうなのですよ。

—— なぜ質問したかというのと、「立場の違う人と話し合う場に参加したことは一度もなかった」、「身近にこういう場がない」、そういうお話がよく出てくるのですよね。ですから、こういう場に参加すること自体にものすごく意味があるんじゃないかなって。

(土田) そうしたら、「このフォーラムに参加して、新たな発見をしたと思ったことがありましたか」にしておいて、「他の参加者から」を取りまして。で、サブクエスチョンは、「新たな発見はどのようなことで得られましたか」。一般市民と話をしている。専門家と話をしている。あるいは、フォーラムに参加したこと自体から。とか。

—— はい。そうですね。

—— そのほうが広いですね。

—— Q29、有意義かどうかというのは、やはり特別に聞く必要があるのですか？

(土田) 本当は、満足度を聞きたいのです。やはり、参加したことにとどのくらい満足したか、というような趣旨のことは聞いておかないといけないと思いますね。で、「満足しましたか」じゃあまりにも薄っぺらなので、「有意義でしたか」と聞いているのです。

—— よかった点、改善すべき点で、そこで分かるかなとちょっと思ったので。

(木村) 定量化できないのですよ。

(土田) ええ。数字で出したい。もっと丁寧に聞くなら、「このフォーラムに参加して、あなたは成長できましたか」みたいな質問もありうるのですが、そこまで聞くのは、ちょっと言いすぎだと思って。

—— そうですね。

—— ファシリテーションを勉強したいとおっしゃった方がいらっしゃったので、ファシリテーションだけがいいのかどうかは分からないけれども、そういうテクニカルな、コミュニケーションのやり方について、聞いてみるのはいかがでしょうか？

(土田) ええと、コミュニケーション能力が向上したということですよ。直接聞きますか？ ちょっと今、いいワーディングが思いつかないのですが。

—— まあ、代表してファシリテーションに絞ってもいいかもしれませんが。

(木村) ファシリテーションも、この前全員がやったと言えど、あれはあまりファシリテーションではないので。やっている人はそれを書けるけど、くじ引きの妙で、偏っているのですよね。第1回に当たった人も、ほとんどファシリテーションをやっていないでしょうし。第2回、第3回はかなりファシリテーションでしたけど。ちょっと数が少ないかなという気もして。

—— まあ、現実には非常にうまくなりましたね、皆さん。

(土田) 「自分の意見を言う技術が向上した」。「自分の意見をうまく話せるようになった」。

—— あるいは、「人の意見をよく聞けるようになった」。

—— Q31 は「自分の考えや思いを伝えることができましたか」と聞いているけど、今言われた聞き手側のことも、そういう意味では、本当は聞いてみたいですね。

(土田) 結局、テクニックというか、技術の問題だと思うのですよ。やはり、技術としてどうか、というところに特化して聞いたほうが良いと思うのです。だからやはり「うまくなったと思いますか」というような聞き方だと思うのですけど。

—— でも、技術に特化するほどはファシリテーションをされていないと思うのですよね。

(土田) そうなのですよ。1回3時間半とはいうものの、たかだか5回ですからね。それでうまくなるのだったら、という気もしないでもない。

(木村) でも、うまくなりましたけど。

—— 格段にうまくなっていると思いますよ。

(木村) 格段ですよ。ただ、それをあえて聞かなくてもいいかなと。

(土田) それはもう行動指標で、録音までしているわけですから、そちらで分析できるかなと。

—— かつ、自分で認識していればいいのではないかと思うんですよね。

—— 自由意見の中に出てくるかもしれませんね。

(土田) そうですね。良かったこと、みたいところで。それにしましょうか。

(木村) あまり「成長」とかは入れたくないですよ。

(土田) 結局これは自己評価ですから、ある意味では自己満足なので、そういう技術のところは客観的なところで測りたい。

—— コミュニケーションは、手段として使っているだけで、あの人たちのコミュニケーション能力を向上させるプロジェクトではないので。

(木村) そうなのですよ。目的はそこではないので。

—— 今の話ですけど、技術ではなくて、例えば、「人の話が聞けるようになったか」とか、「人の話を聞く態度が身についたか」とか、さりげなく聞くことはできなくはないような気もするのですけど。

(木村) Q31 の対として、「他の人の話にどのくらい耳を傾けられましたか」みたいに、さらっと聞いてしまうという手はありそうな気はしますけどね。

(土田) 私の中では、Q31 の対は Q32 だったのですが。

(木村) なるほど。共感する。尊重する？

(土田) ええ。だから、自分の意見は自分の意見として、ちょっと抑えておいて、他の人の意見を受け入れるっていうことですよ。

—— でも、受け入れる前に、じっくり聞くという入口のところを、

—— あの、いいですか。やはり時間管理もありますし、ファシリテーションがどこまでできたかは別として、決まった時間内に皆の意見を聞くために、自分が言いたいことを我慢した方もいらっしゃると思うのですよ。だから、そういうところを、

(土田) ええと、「他の参加者が意見をちゃんと言えるように工夫をした」。工夫はおかしいか。まあ、本当は「我慢した」なのですが、我慢したというのはちょっと。

(木村) すみません、「共感」というところに今引っかかったんですけど、これは納得の意味の共感ですか？

(土田) 自分と同じ意見だな、そういう意見もあるな、ぐらいですね。

(木村) 「そういう意見もあるな」を「共感」とはたぶん読めなくて。「共感」というと、こういう答えはすごく自分とシンクロしているな、って読む気がするんですけど。

(土田) いや、それでいいのです。Q33をトリッキーといいましたが、「共感」で「説得された」ことが測れるだろうと思って作ってあります。だから、おっしゃる通りです。ただ、それよりも浅くても構わないと。

(木村) そういう意味では、追加してほしいなと思うのは、一応このフォーラムは「尊重」というのをひとつのキーワードにしてやっているのだから、ちゃんと人の話を聞いたかどうかについては測ってほしいのですよね。「共感」というのはそういう意味かと思っていたけど、違うのであれば、「納得できる話を聞いたことがありましたか」とか、そういうことにしたほうが分かりやすいかな。

(土田) ああ、そうしますか。「納得したことがありますか。」

—— 「納得」と「共感」は近いから、むしろ、ちゃんと聞けましたか、のほうがいいと思います。

(木村) ええ。「ちゃんと聞けたか」という質問を追加して、あとは、「自分が納得できるような意見が聞けたか」という、2つにするということです。

(土田) なんだったら、「共感・納得」ぐらいでもいいかなと思っているんですけど。

(木村) これは、そういう意味の「共感」ですよ。私はフォーラムの中でも、「共感」というのはシンパシーとエンパシーがあって、このフォーラムはエンパシー的なセンスで、ぜひ皆さんの間で、尊重というか、そういうことをやってくださいってお願いしているのに、こういう聞き方しかないというのは、良くないですよ。

(土田) なるほど。では、具体的に、「あなたはこのフォーラムに参加して、他の参加者の考えや思いを尊重していましたか」。何回も尊重していた。尊重していた。尊重していたことはほとんどなかった。

—— 「尊重して聞くことに努めましたか」とか。

(土田) 「尊重して聞くことに努めましたか」は、調査のワーディングのテクニックとしては、言葉が多すぎるのですよ。

—— 「尊重できましたか」。

(土田) 尊重できたか、だと、納得・共感にかなり近くなってくるのですよね。

—— この「共感」のところは、共感・同意とかにはしてはいけないのですか？

(土田) いや、「同意」でもいいです。同感でも共感でも納得でも、ほとんど同じですから。

(木村) 「共感」という言葉は、私は区別してくださいと言っているので、「共感」は、逆に使わないで下さい。納得、同意とか、違う文意のものでお願いします。

で、「尊重」のほうは、「尊重」という言葉は使わなくてもいいのですが、「他の人の話を聞くように心がけましたか」とか、そういう形がいいのではないかと思うのです。

(土田) そこに、「自分の言いたいことを言わずに」ということを、あえて入れたほうがいいのか、入れないほうがいいのか。

(木村) 入れなくていいんじゃないですか。シンプルにやるなら。それを入れると、また複雑化しますよね。

(土田) そうなのです。では、「相手の意見を聞きましたか」。

—— 「真摯に聞くことができましたか」。

(土田) ただ、逆に考えると、「他の参加者の意見を聞きましたか」って単純に聞いたら、聞かなかったという人はまず出てこないのですよね。皆聞いたと答えると思うんですよ。

調査の鉄則で、皆同じ答えしかしないような質問はしなくて構わない。だから、聞かなかったという人も出てくるようなワーディングにしたいのですね。

—— 「他の人の話にじっくり耳を傾けることができましたか」。じっくりできた、少しできた、あまりできなかった。

(土田) ええと、「フォーラム全体の進行を考えて、発言するように努めましたか」ではダメですか？

(木村) 「発言」ではないのですよ。「聞く」なのですよ。

—— そうですよ。だから、フォーラムのルールがありますよね。1分ルールとか。そういうものを守って、みたいなことを入れたらどうなのでしょう。

(土田) 「提示されたルールに則った参加ができましたか」とか。

(木村) そういうことではないです。「聞くことができたか」なので。

「そういえばあまり聞いていなかったな」って、あると思いますけど。全員が「聞いた」って言うかな？ 皆が聞いたと言ったら、それはそれで私は重要なメッセージだと思いますけど。

(土田) 逆から聞いては駄目ですか。「他の人の意見を聞かずに、自分の意見を主張をしたことがありましたか」とか。

—— それは皆やっているでしょう。

(木村) それはあります。聞いて、言うのはいいんですか？

(土田) 一応聞いたんだから、いいんじゃないですか。

(木村) あの、「言う」というアクションを聞きたいのではなくて、「聞く」、「受け入れる」ほうを聞きたいのですよ。

—— 聞く力は、すごく大事なのですよね。こういう話では。

(土田) では、「他の人の意見を聞きたくないと思ったことがありますか」。

(木村) うーん。それはマイナスメッセージだなあ。

—— 「他の参加者の意見を聞く能力が向上したと思いますか」。

(土田) そういう聞き方はありますね。それでいきましょうか？

(木村) 「向上」でいきますか？

—— 「理解」という言葉はよくないのですか？ 「他の人の意見を理解することができましたか」。

—— 「理解」は使わないほうがいい。それはさっき木村先生が言われたシンパシーとエンパシーの問題に触れるから。

(木村) 私は、単純に、「他の人の考えや思いを尊重できたと思いますか」でいいと思いますけど。

—— それだと、ほとんどイエスになってしまうのでは？

(木村) そうでもない気がするんですけどね。

—— 程度を聞いたほうがいいような気がする。

(木村) ああ。「どのくらい尊重することができたと思いますか」。

—— やはり、フォーラムに参加する前よりは、ということですね。

—— そうです。そういう聞く能力とか、人の言っていることを尊重する能力とか、そういうものが、参加したことで向上したと思いますか。それは、境界を越えることにつながる話だと思うので。

(土田) ちょっと整理させてください。尊重したか、という事実を聞くのか。尊重する能力が高まったか、という能力を聞くのか。どちらでいきますか？

(木村) このフォーラムを通しての変化を聞きたいなら能力ですし。態度というか、そ

ういうものを聞くなら前者になると思います。どちらを聞くかですよ。

(土田) 一応、能力という意見が出てきているんですけども、元々は能力という発想はなかったのですね。

—— だけど、ルールには聞きなさいと書いてあるから。聞くことが重要ですか、と聞けば、ルール上はイエスとしか答えられないんじゃないかな。

—— 能力とまではいなくても、態度が身につくかどうか、そのくらいのイメージで文章を作っていたかのはいかがかなと。

(土田) では、「他の参加者の意見を尊重することができましたか」。いつも尊重することができた。どちらかといえば尊重することができた。

(木村) いつもか…。

(土田) では、いつもはやめて、尊重することができた。どちらかといえば尊重することができた。どちらかといえば尊重することができなかった。尊重することができなかった。

(木村) それは5択にしないんですか？

(土田) 今のだと4択です。どちらともいえない、というのを強引に真ん中に入れることもできますけれども。

(木村) 要は有意義(Q29)と同じ聞き方ですよ。なので、その場合は5択にしてもいいんじゃないですか？

(土田) まあ、そうですね。微妙な質問だから、それでもいいですね。では、有意義と同じ選択肢で、「他の人の意見を尊重することができましたか」。

(木村) はい。それを入れておいたほうが、フォーラムの成果としては分かりやすいという気がします。

—— Q32はどういうワーディングになるんですか？

(土田) ええと、「共感」をやめて、同意したことがありますか。あるいは、同意・納得したことがありますか。どちらかでいこうかと思います。

—— 今の「尊重することができましたか」の設問は、何番になるのですか？

(土田) 微妙なところなのですが、ひとつの選択肢は Q30 の次です。議論できたか。意見を尊重することができたか。伝えることができたか。同意・納得したか。という流れがひとつです。

あとは、その下、どこに入れても一応理屈は立ちます。

(木村) はい。では、そんな形でよろしいですか？ 他はどうですか？

—— Q19 は、13 番だけが、「原子力の政治家」という聞きなれないワードになっていて。原子力の政治家というのは何を指すのですか？

—— 原子力推進の政治家、という感じですか？

(土田) まあ、そうなのでしょうね。

—— 「政治家」だけでもいいんじゃないですか？

—— 反原子力で票を集めようとする人もいますよね。だけど、その人は自分が原子カムラだと思っていないと思います。

(木村) そういう話はフォーラムの中で出てきていないですから。これは一応出てきた議論から取ってきているものなので、そういう意味では「原子力推進の政治家」にしてあげばいいと思います。

—— 他とワーディングを合わせるなら、「原子力を推進している政治家たち」と。

(土田) ええと、「専門家」とか、「家族」とか、人以外にはたちをつけていないので。

(木村) では、「原子力を推進している政治家」ですね。

そろそろ時間の関係もあるので、次に進みたいのですが、アンケートのところは、他はよろしいですか？

そうしたらもう 1 個あるので、もう 16 時ですけども、進めたいと思います。

4. フォーラム終了後インタビューについて

(木村) インタビューについてです。

インタビューの依頼状とガイド、あとはインタビューの日程調整表と地図を書いている資料を作りました。読んでもらえればと思いますが、注意点だけ読みます。

フォーラムインタビューという名前をつけていますが、フォーラムインタビューは個別に行います。インタビュアーは、木村、他 2 名。フォーラムインタビューでお聴きしたい内容の概要は、裏面に記載されております。インタビュー当日は、このインタビューガイドを基に、話を展開いたします。フォーラムインタビューにかかる時間は 1 時間半～2 時間程度、で本当に終わるのかというのはあるんですけど、を予定しています。フォーラムインタビューの日時は、別紙調査票の回答によって調整し、こちらから連絡いたします。場所は、パブリック・アウトリーチでやろうと思います。フォーラムインタビューは、同意の上、録音いたします。録音したデータが公開されることは一切ございません。フォーラムインタビューの結果について、これを分析し、成果を公表しますが、個人情報特定される形で公開されることは一切ございません。フォーラムに関わる謝金は 5,000 円（税抜き、交通費込み）です。ということにしております。

裏がインタビューガイドです。最初は原子力やエネルギー全般について、フォーラムに参加する前にどういう考えをお持ちだったか。1-2 は、今はどう考えているか。これは聞けば 1-3 はもう聞かなくてもいいんですけど、一応、フォーラムを通じてお考えが変わったかどうかということ念のため聞くということになっています。

2 番目も、「原子カムラ」に置き換えて、前と、今と、フォーラムを通じてというのを聞いています。そして 2-4 に、「原子カムラ」（もしくはその境界）は越えられるとお考えでしょうか。越えられないとお考えでしょうか。また、そのようにお考えになる理由は为什么呢ということをお聞きするようにしています。

3 番は、原子力の専門家について、前と、今と、フォーラムでということをお聞きしています。

4 番は一般の人びとと原子力との関係について、ちょっとややこしいんですけども、そういう聞き方をしています。これも前と、今と、フォーラムを通じてということです。

5 番、フォーラムについて、あなたのお考えをお聞かせください。フォーラムに参加する前に何を期待していたか、ここでもう一度お話を伺って。フォーラムについて、印象に残っていること、特に覚えていることを教えてくださいということ。この辺は少しワーディングを考えないといけないかなと思います。フォーラムについて、よかったこと、悪かったこと、改善提案、意見や期待など、何でも結構ですので、自由にお話しください、というような形で作っています。

で、次のページが日程調整表ということで、回収はファクスか郵送かと思っているんで

すけれども、どうですか？ 郵送だと時間がかかるのですよね。もし郵送なら、裏面に地図をつけても意味がないので、別の紙にしなければいけない。ファクスだとこれでいけるんですけど、まあ、間違えて地図が送られてくることがあるかもしれない。

—— ファクスって、若い方はお持ちなのですかね？

(木村) そこがあるなと思って。そういうことも踏まえて、何がいいのかなというのがあります。ファクスでもいいし、メールでも構いません、とかにしますか？

—— メールで送れないんですか？

(木村) 送れるとは思いますが、あとで送ることになります。別途またファイルをお送りするので、そちらでもかまいません、ということになって、手間が1つ増えるのです。

土曜日に話をして、月曜に送りますなんていうのはダメなわけで。土曜に作業するんだったらいいですけど、懇親会があって、その後にさらに送るというのは、結構厳しいかなと思って。

—— メールアドレスを持っていない方もいますよね。

(神崎) メールを持っていらっしゃる方だったら、送りますよ。

(木村) 土曜日にですか？

—— でも、携帯のアドレスの人もいるので。

—— じゃあ送れないですね。

—— スケジュールを見たんですけど、お盆の期間もやるのですね。

(木村) 一応、お盆の期間の土曜日だけは外しています。あと、日曜は全部外しているのだけど。たぶん、この時期にやらないと、忘れると思います。1か月经つと、もう忘れるので。

—— 日程に関してなのですけど、こんなに親切に1か月も期間を設けなくて、もうちょっと集約して聞いてもいいんじゃないですか？

(木村) それは、今までの経験上、無理なときが多いのです。

(土田) アンケートを郵送で返却してもらいますから、それに同封して送ってもらう手もあるんじゃないですか？

(木村) それは、アンケートの回収日によります。回収日をいつにするか。で、その後に調整になるのです。

(土田) でも、アンケートも一週間は間をおきたくないですね。終わってから 1 週間後には返してくださいって。

(木村) アンケートは土田先生のところに行くじゃないですか。そこからさらにこちらに戻ってきて、という手間があるのですよ。

あとは、ちょっと思っているところがあつて。3-2 で、専門家の理想の姿はどのようなものだろうかって聞いているのですね。それで、一般の人たちのインタビューを先にやって、そこである程度、こういう像ですっていうのを専門家に後半で聞きたいというのもあつて。なので、これだけ多くの日数を取っているのです。

—— この日程調整表は、最終日に渡すわけですよね。今書ける方は書いて、置いていってくださいって言えば、何枚かは集まるでしょう。

(木村) それをやったほうがいいですよ。

—— 懇親会があるのだから、そのときに手帳を見て書けばいいことじゃないですか。

—— 半分くらいは書いてくれるでしょうね。

—— あとは、ファクスで大丈夫ですか、メールですか、って聞いて、対応したほうが早いのではないですか。メールもファクスも駄目っていったら、その人と相談したほうが早いと思います。

(木村) そこは神崎さん、お願いして大丈夫ですか？

—— 締め切りを切ったらいいんじゃないですか？

(木村) はい。

—— それと、先に市民の方からいろいろコメントを聞いて、後で専門家に聞きたいということであれば、もう市民の方に、8月上旬までの間で返事をしてくださいと。

(木村) ただ、そういうメッセージを最初から与えたくはないのです。

実はお盆を取っているのはそういう意味もあって、基本的にはお盆は外したいんだけど、専門家の人たちは9月になってくると忙しいので、たぶんお盆くらいが暇なのです。

(神崎) そうだったら、今週もうメールでお願いしてはいませんか？

(木村) 前回のフォーラムで、それを次回ご説明しますと言っているので、説明前にこういうのが来るのは、あまりよくないことです。

—— 懇親会のと書きしてもらえばいいのですよ。1週間でいいですよ。早くしなかったら忘れちゃうから。意見を書くわけじゃなくて、都合を書くだけですから。3日でいいと思うけど。

(木村) 逆に、何日までにとってあえて書かないのは、できるだけ早くというつもりだからなのですけど。

—— 基本的には今日中と。スケジュールが今日確認できない方は後ほどメールかファクスでお願いしますと。

(木村) はい。早めに日程を確定して、すぐお知らせしないと、1か月ずっと取っておくわけにはいかないのです。早くお知らせしますという形で。

—— 調整表の裏面に、提出後変更がありましたらこの番号にお電話くださいって書いてありますけど、表に書いたほうがよくないですか？ あ、でも、これは提出しちゃうのか。

(土田) だから、後ろに地図とかは載せない。

—— 自分がどこに丸をしたのか、ちゃんと自分のノートに控えておかないと、分からなくなっちゃいますよね。倍印刷しておくとか。

(土田) まあ、それが親切ですよ。

(木村) では、とりあえずその場で回収するのと、それで回収できなかった分はファクス、もしくはメールで対応すると。その対応は、すみませんが、事務局のほうでやってください。早く決めて、早く連絡したいので、月曜にではなくて、その日のうちにやってもらわないと。そこが面倒くさいなと思ってメールはいやだったんですけど、そこは、もうお願いします。

あとは、ガイドのほうですけど、これはもう私と竹中君のほうで検討してしまっているんですか？ もう時間も時間なので。

これは絶対に聞いておきたいとかがあれば、今言っていたらと思いますけど。

—— 1番の原子力やエネルギー全般について、あなたのお考えをお聞かせください、のところで、原子力やエネルギー全般について、どういう方法というか、どこから情報を得ていましたか、っていうのがあったら面白いかなと思うんですけど。

—— 情報のソースっていうんですかね。

—— この質問の後にこれを続けて聞くかどうかという細かい設計は、お任せしたらいいかがでしょうか。

(木村) はい。そのつもりです。これはあくまでガイドで、半構造化インタビューにする予定なので、そういう付随的なものは、細かいものを別に作ってやる予定です。

でも、その半構造化の参考になるので、何かあれば、ということですけど。

—— 先生、何ておっしゃったんですか？

(木村) 半構造化です。構造化というのは、もう決まったことしか聞かないんですけど、半構造化は少しそこから展開できる。

—— このインタビューガイドを読むと、アンケートと似たような質問が出てくると思う方が多いと思うので、「アンケートと似た質問がありますが、じっくり伺いたいので」とか、そういうことは書かなくていいですか？

(木村) 書いたほうがいいですか？

(土田) 書いたほうがいいと思います。

—— なんでアンケートで聞いているのに、わざわざインタビューで同じことを聞くの？
って普通だったら思っちゃうかなと思うんですけど。

(土田) これを最初に出すのであれば、ですよ。

—— これは配るんですよ？

(木村) はい。配ります。

—— 特に2ポツなんかは、そんな感じがしますね。

(土田) アンケートとインタビューで、お互いに影響を与えますね。アンケートに答えるときも、インタビューのときに詳しく話せばいいやと思って、ざっくりになるかもしれない。

(木村) ここは事業者が分担しているので。調査はあくまで学会の事業なのですよ。インタビューは私たちの事業なので、まあ当然インタラクションはありながらも、あえてそこを強調しないほうが、素直にやってくれるかなという気がしていたんですけど。

(土田) ただ、答える側にしてみれば、おっしゃる通りで、なぜ二度手間するのって疑問に思われると、いけないですね。説明してあげたほうがいいですよ。

—— それは口頭でもいいですよ。

(木村) そのくらいは書いてもいいかなとも思うので、書こうかなとは思っていますけど。まあ、あまり読まないとは思いますが。

—— 私なんかは、箇条書きで選択していくアンケートと、対面で直にお話するインタビューは、まったく違うと思っていますけど。

(土田) ああ、そうなのですか。

—— 選択の中に入らない思いがあったりするじゃないですか。

—— 答えを用意しておく人も、中にはいますよね。

(木村) います。で、結構細かく書いているのは、市民の方々はこんなに細かく書く必要がないんですけど、専門家の人は、これくらい書いておかないと答えられないという可能性がある。

—— でも確かに、NPO の事務局までわざわざ行って答えるっていうところにモチベーションを持たせるためには、このくらい書いていないと。普通だったらインタビューに来るのが当然じゃないかって思いますので。もうフォーラム終わったんですからね。

(木村) とりあえずフォーラムの後のインタビューまではご協力くださいと書いてあるので、そこは大丈夫だと思います。

—— ただ、場所は言ってなかったと思うんです。

(木村) 場所は言っていないです。なぜ先方をお訪ねしないかという、人によっては、じゃあ喫茶店で、とかになって、録音環境が悪くなるんです。時間も取れないし。そういうときがよくあるので、そういう意味では、ちゃんと整備されたところでやるという形です。

ということで、インタビューガイドのところは、少し私と竹中君のほうで検討させてもらうということで、対応したいと思いますので、よろしくお願いします。

6. その他

(木村) 今日の議題は全部終わって、最後にその他ですけども、第 6 回以降のフォーラム研究会の予定について、日程調整をしたいと思います。インタビューの日程調整表を転用したいと思います。皆さんの手元にあると思うので、この会が終わった後、ここに書いて出していただければと思います。

次回はシンポジウムの検討なのか、フォーラム後の分析の報告になるのか、その辺は分からないのですが、8 月中に 1 回、もしくは 2 回くらいやったほうがいいかもしれない。少しまた連絡をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

シンポジウムの日程は 9 月 16 日ということです。13 時からということでプログラム案を組んでいますけれども、そういうことにしたいと思っています。

—— 準備は 11 時半からでしたっけ？

(木村) 準備は 11 時に現地集合にしようかなと思っています。

(神崎) シンポジウムに参加した方に、謝金をお支払いできるのでしょうか？

(木村) 払います。

(神崎) そうですよ。それもおっしゃったほうがいいと思います。

(木村) そうですね。

ということで、第5回のフォーラムが7月20日ですね。また11時に直前の打ち合わせをさせていただきたいと思いますので、11時に集まっていただくということでお願いします。

ということで、今日はここまでにしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上